
Little Busters ! -Side Story's-

Longer_Than

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Little Busters ! — Side Story
S—

【Nコード】

N7818P

【作者名】

Longer Than

【あらすじ】

初めに言っておきますと、この作品は連載というよりは短編集に近いです。Refrain後のストーリーもあれば、本編中のサイドストーリーもあります。更に、作者による暴走カップリングも多いです。不定期更新&オリジナルシナリオもありますが、お暇な方はどうぞご観覧ください！

短編 Refrain AFTER (前書き)

初めまして！

この短編にはRefrainのネタバレが含まれています。

更に、自身の想像によるアフターのため設定が勝手に位置づけられていきます！↑ここ重要

あくまで作者が考えた 「もし…」 の展開です。

それでもOKという方は、どうぞご観覧下さい！

短編 Refrain AFTER

「懐かしいな…何もかも。」

「ああ、まったくだ。…それより、真人。」

「フツ、フツ…ああ？ 俺の筋肉を呼んだかい？」

暗くなった校庭の中心には、後付けされたライトと机にイス。季節は五月末。風はもう暖かく、肌を撫でる様に吹いていた。

口の上に白髭を生やした謙吾は、呆れた様に真人を見る。

相変わらず時間があれば筋トレの真人に、思わず苦笑する。

「恭介…お前、本当にあと1年で30なのか？」

「そうだが…なんでだ？」

「…余りにも若すぎるだろう。というか、変わってないんじゃないか…？」

「ははっ、気にすんな。おめかししてきただけだ。」

隣で夕暮れを眺める恭介に、謙吾は疑問の視線しか向けられない。あれから長く経つというのに、恭介は全然変わらない。真人とは違ったベクトルで変わっていない。

しかし今はそんな事は深く考えず、ただ思い出に浸った。

あの頃の自分を、思い出すかの様に。
手には古ぼけた竹刀を握って。

「その少年三人組。感傷に浸っている時間があるのなら、こちらを手伝っていただきたいな。」

「ああ、わりいわりい。おい、真人！」

「何だよ恭介…せっかくだいい筋肉だったのによ…。来々谷もだ！」

「何だ真人少年。恭介氏に謙吾少年まで手伝ってくれているのだぞ？」

「うるせー！ 少年って俺達もう28だぞ！！！」

「はっはっは。心は未だ少年のままだろう？」

いつのまにか後ろにいた来々谷が、三人を呼んだ。
ちなみに彼女も恭介と同じくらい変わっていない。強いて言えば、
余計Sっぽくなったただけだ。

袴姿を気にせず、皿を運ぶ謙吾。

恭介は網の上に、肉や野菜などを乗せていた。

ほどなくして、食堂の方から女子グループがわさわさと出てくる。

「クーちゃん♪」

「何ですか小毬さん？」

「暗いから足元に気をつけるんだよ？」

「はい！」

「って…ひゃあああっ！！？」

「だ、大丈夫ですか小毬さん！？」

「いったあゝい…自分で言ったそばからこけちゃった…。」
「まったく、小毬ちゃんのドジは全然直ってないですよ！」
「…三枝さんの騒々しさは余計増していますね。」
「もっと褒めてもっと褒めて♪」
「…寧ろ虐げてます。」

小毬は少し髪の毛が長くなっているが、その笑顔は健在。幸セス
パイラルは続いている様だ。

クドリヤフカは相変わらずの小ささ。帽子とマントは忘れず付けており、小学生と言ってもばれないだろう。

葉留佳のツーテールも変わらず、その騒がしさにもいつそう磨きがかかっている。

美魚は夕暮れ時なので日傘をさしているが、その姿はより大人びた雰囲気を出していた。

女子メンバーがそれぞれ集まり、恭介達も準備が終わる。

全員席に着き（内一名は腕立て伏せ）、談笑を始めていた。

「あれから…10年も経ったんだよな。」

恭介が静かに、懐かしそうに呟く。

その言葉に、メンバーは小さく笑顔になる。

「そうだね…。あれから10年、私もおばさんだよ。」
「わふーっ！ 未だに小学生と間違えられます!？」

「それに：バスターズ内でデキちゃうんだしね？」

「ううっ！」

「わふっ!？」

葉留佳の発した言葉に、真人とクドが硬直する。

真人に至っては腕立て伏せで顎を地に着けたままだ。

その言葉が意味するのは、いい事。

「全く：真人少年とクドリヤフカ君がなあ：。」

「身長的にはアンバランスですが、お似合いだとは思いますよ。」

「183cmと145cm。頭二つ分以上だがな。」

「うるせえーよっ！ 何か言ってやれクド!!！」

「そうですよ！ マサトが上に伸びるのは、頭が軽いからなので
す！」

「ぬおおおおおーっ！ フォローになってねえーっ!!！」

真人はクドの解説に、頭を抱えて唸る。

クドは反面慌てふためき、真人の頭を取りあえず撫でていた。

その風景に、メンバーは小さな笑みを溢す。

真人とクドリヤフカは、共に道を歩き出していた。

「だがそう言えば：もう1組あったよなあ？」

「ぬうっ！」

「はわわっ!？」

「…随分分かりやすい反応ですネ、はは。」

「全く…皆、お姉さんの下を離れていってしまう。」

「ぐう…恭介…！」

「きよきよきよ、きよーすけさんっ！」

今度は恭介が意地悪気に大きな声で言い、謙吾と小毬が慌てだす。結果小毬は勢い良く飛び上がった時に足が攣り、悶える始末。どこかの馬鹿が「筋肉さんがこむらがえったな。」と言っていたが、気のせいだろう。

落ち着きを取り戻すと、今度はメンバーの視線が謙吾と小毬に向けられる。

「…少年二人が恭介氏を抜くとはな。」

「まったくだ。俺はこれでも、モテてた方だと思ってたんだがな…。」

「わふー…小毬さん、お似合いですよ！」

「くくくクーちゃんっ！ な、何言ってるのおっ！？」

「あはは…慌て方にも磨きが入ってますネ。」

「…心頭滅却、だ。」

「…やったのか？ 謙吾。」

「ぶはあっ！！ ば、馬鹿な質問をするな恭介…！」

恭介に乘せられた結果、謙吾までもがあたふたしていた。しかし当然、酷く扱われる事など無い。皆が祝い、笑顔だ。

謙吾も小毬と目を合わせ、小さく苦笑し合った。

「しっかし…主役が遅いですヨ？」

「だな。渋滞に巻き込まれたってのは聞いたが…。」

「フツ、フツ…俺の筋肉が唸ってる！ 無事か無事かとな！」

「マサト、筋トレやめるです！」

「わっ、わりい…。」

「…ちなみにクドリヤフカも、強くなったな。」

「うん、凄いよクーちゃん〜！」

「そ、そーですか？ マサトといたら、自然に…。」

「俺かよっ!？」

途中から話がずれていたが、それでも全員が同じ事を思っているはず。

恭介はそう考える事が大いにできた。

この場にいないあと二人。

もちろんあの二人である。

今恭介達がここにいられる、一番の恩人。

「ま、もっとも…俺達が、強くしてやったんだけどな。」

「ああ？ 何言ってるんだ恭介？」

「あの二人さ。まさか、覆すとは思って無かっただろう？」

「…同感だ。だが、感謝以外の何物でも無いだろう。」

「…鈴ちゃん、元気かな〜？」

「リキもですー。」

そう。

この場にいないのは理樹と鈴。

この二人こそが今回の主役でもある。

修学旅行の事故。

理樹と鈴を強くし、二人だけで生きていけるために作った虚構世界。

その中で、確かに二人は強く、逞しくなっていた。

だがその希望は恭介の予想をも上回り、結果全員が助かったのだ。自分達だけでなく、皆を守る程強くなっていたのである。

「…理樹君と鈴君に、感謝せねばな。」

「…そうだな。俺の、俺達の…命の恩人なんだから。」

「へへっ、何て言っただって俺のルームメイトだからな！」

「それで理樹を独占したつもりか真人？ 理樹の本当の気持ちも知らず、哀れだな…。」

「ああん？ やんのか謙吾！？」

「やってやろうじゃないか！！！」

「二人共やめてー！（やめるですー！）」

一応自分の好きな人がいる前で、理樹争奪戦を始める真人と謙吾。取り残された小毬とクドは、止めに入りながらも楽しそうだ。

「待て待て、二人共。」

「む…恭介か。言っておくが、理樹は俺が…！」

「止めてくれんな恭介！ この白髪に理樹は俺の…！」
「…ま、誰のもんかは分かってるだろ？」

恭介が小さく耳打ちし、二人は一瞬で我に返る。
と言うより、萎えてしまっていた。

「それを言ったらしまいだぜ、恭介…。」
「…ハイキック、来るだろうな。真人。」
「確かに。聞かれてたらずかったぜ…。」

そうやって二人が話し合っている時だった。

校門付近が車のライトで照らされ、すぐに消える。
そしてドアを開ける音と閉める音。皆が静かになったので、鮮明
に聞こえる。

全員が一瞬で静まり返った。

「うう…遅くなってしまったな、理樹。」
「渋滞が凄かったからね…。でも、恭介なら許してくれるでしょ。」

「…懐かしいな、皆。」

「うん…。あれから、一度も会ってないんだよね。」

「理樹が異常に忙しいせいだな。」

「いやいやいや…仕方が無いんだってば。」

「そんな事無い。な？」

「…うん。」

「うー！ あーあー！」

「…いやいやいや。二人して賛同しないでよ…。」

その声が少しずつ近くなる。

そして、明かりに照らされた。

二人の、笑顔が。

「…久しぶりだね、皆。」

「遅れて、すまなかった。」

「うう…。」

「だぶー！ ういーっ！」

理樹と鈴。

そして、理樹の後ろに隠れる子供と鈴の腕に抱かれた赤ん坊。

「…理樹いいーっ！ 久しぶりじゃねえかコノヤロウ！！」

「待て筋肉馬鹿！ 先に抱きしめるのは俺だ！！」

「何言ってやがる！ 俺の筋肉は理樹の筋肉と早く結合したいっ
つってんだよっ！！」

「いや、気持ち悪いから。特に真人。」

「ぬおおおおおーっ！！ 10年振りの再会で気持ち悪いって
言われたーっ！！」

「冗談だってば！ 露骨に凹まないでよ！！」

「理樹…。」

「あつ、恭介…！ 久しぶり！」

「…鈴の腕に抱かれてた赤ん坊は、何だ？」

「えっ？ あ、えと…二人目？」

「うわあああーっ！ 何故俺に伝えない！？ ハガキにでも書けよ…！」

「そういえば、書くの忘れてた。ごめんね。」

理樹は真人と謙吾の言い合いを見ながら、恭介と話す。

理樹の後ろからは、小さな男の子が姿を覗かせていた。

「一番目か？」

「うん。ほら、挨拶しなきゃ。」

「…初め、まして。なおえ、きょうすけです。」

「ああ、初めまして。俺も恭介、棗——…って、きょうすけ！
？」

「…きょうすけ。」

「…理樹。」

「な、何かな？」

「…そこまで、俺の事を…。」

「いやいやいや…。」

「キシヨいわボケエツ…！」

「ふぐあつ…！」

恭介があらぬ勘違いをし、女性陣の中にいた鈴が飛び出てハイキックを喰らわす。

それは真人の役目だったのだが、クドとの関係があるためやりに

くそうだ。

そのまま何事も無かったかの様に、女性陣の中へ戻っていく。

「可愛い♪ 何ていうの？」

「…祈^{いのち}だ。」

「猪木！？ まさかのプロレスラー希望っすか！？」

「違うわボケ！ いのりだ！ な？」

「うー、あうあうー！」

「わふーっ、頬っぺたふにふにですー！」

「…可愛い…！！」

「…来々谷さんが危ないです。」

鈴の抱く赤ん坊を見て、それぞれが感想を漏らす。

そんな中でも、恥ずかしそうにだが鈴は嬉しいらしく、先程から笑顔のままだ。

抱かれた赤ん坊の祈も、笑顔であーあー言っていた。

理樹と鈴の二人がさんざん質問攻めにあったあと、恭介は全員に言う。

「おーい、皆！ そろそろ席着けよー！」

「はーい♪」

「お前は相変わらず…ってほんとに変わらないなお前！！」

「何だ鈴？ お兄様が若いのはいい事じゃねーか。」

「自分でお兄様言うな！ キモイ！！」

「ぐっ…。ぜ、全員席着いたかー？」

それを確認してから、恭介は立ち上がる。

表情は笑顔。満面の笑みだ。

「今日は…記念日だ。」

「記念日？ 何かあったか？」

真人が頭を掻きながらそう言う。

そんな真人に、恭介は小さく溜め息。

「…10年前のこの日。」

修学旅行のバス事故だよ。」

「…！ そう言えば、そうだったね…。
忘れられないよ。」

「そうだな。あれは一生もんだ。」

「お前は今、忘れていたんだぞ？」

「るせえっ。」

そう。

10年前のこの日。

それはリトルバスターズの本当の始まりでもあり、終わりにも繋がる日だった。

修学旅行に向かう途中、バスが崖下に転落。

理樹と鈴を庇った謙吾と真人はもちろん、リトルバスターズの面々にバスに隠れていた恭介までもが助からない状況だった。

助かるのは、理樹と鈴だけ。

だが、まだ二人は弱かった。リトルバスターズ無しでは、生きていけない程に。

そして恭介を中心に虚構世界が出来上がる。

その中で、幾度も一学期を繰り返し。

強くなっていった理樹と鈴は、恭介達の命までも救えるまで成長したのだ。

「…今日は厄日なんかじゃねえ！

リトルバスターズの、本当の始まりの日だ！！

…今日ここで、皆でいられる事に…乾杯だっ！！」

「いえーい！ かんぱーい！」

「かんぱいですー！ わふーっ！！」

「筋肉で乾杯するか？ 謙吾！」

「フッ、いいだろう！！」

「…いい風景だ。な、葉留佳君に西園女史？」

「うひょー！ あひよひょーっ！！」

「…はい。自然に、笑顔になってしまいます。」

それぞれが思い思いに乾杯する中、理樹と鈴は目が合う。
隣同士なのだから、当然なのだろうが。

「…これが、僕達の望んだ世界。」

「…ああ。そうだ、な？ 理樹。」

「…うん。僕達は、全員でリトルバスターズなんだから。」
「…そだな。」

互いに微笑み、大きく笑う。

笑う門には福来るというのは正解なんだろうと思える、楽しい時間。
かけがえの無い、大切な一時。

「…ね、パパ。」

「ん？ どうしたの？」

「…パパ、泣いてる。悲しいの？」

「え？ あ、ううん。全然、悲しくないよ。」

「じゃあ、どうして泣いてるの？」

「…これはね。」

唐突に尋ねてきた息子のきょうすけ。

言われてみて初めて、理樹は自分が泣いている事に気付く。
ただ、それ以上涙が流れる事は無かった。

次に見せたのは、最高の笑顔。

「…嬉涙、っていうんだよ。」

自分は何よりも望んだ、最高の世界を。

今を生きていられる事に、流した涙だった。

短編 Refrain AFTER (後書き)

ここまで見て下さってありがとうございました。

今回はリフレインの後の未来を勝手に想像した結果です（汗
理樹×鈴 真人×クド 謙吾×小毬

……色々やばいですが、気にしないで下さい。

今後も短編的な物を書いていきたいと思います。
お暇な方は、どうぞ見てやってください。

短編 真人とクドリヤフカ（前書き）

WARNING!!

この話にはネタバレ&オリジナルが含まれています。
原作崩壊のイメージあります。

苦手な方は回れ右でお願いします。

短編 真人とクドリヤフカ

クドリヤフカは困っていた。
教室を見回し、溜め息を吐く。
視線の先にいたのは…

「真人！ 筋肉筋肉〜！」

「おう理樹！ 筋肉わっしょい！」

「謝筋肉祭だ！」

「おう！ 筋肉旋風だぜ！」

ノリノリで筋肉筋肉と叫ぶ理樹と、セッションがどうかと言っている真人。

たまにバカになる理樹は、修学旅行事故以来も治っていなかった。
見れば、あんまりはしゃぎすぎて鈴にハイキックをかまされている（二人とも）。

クドは寂しそうに笑う。

理樹は、鈴と笑っている。それでいいのだ。

そう、自分に言い聞かせていた。

「おっ、どうしたクー公？ 元氣無いんじゃないか？」

「え？ い、いえっ！ そ、そんな事無いです！」

「そうか？　なら、いいんだけどよ。」

突然真人に声をかけられ、肩がびくりと上がる。

理樹では無く、真人が気遣ってくれる。

端から見れば珍しいかも知れないが、真人は普通の善人である。
天然バカの称号を得ているが、何かと鋭い一面も持っているし。

クドは再び理樹の方に歩いていく真人を見て、不思議そうな表情を浮かべていた。

：

変わって場所は食堂。

クドはひじきをちまちまとつまみ、口に放り込んでいる。

今は一人だ。

理樹や鈴の邪魔をしてはいけないと思い、自然と修学旅行以来は一人で食べていた。

ただ、もちろん理樹達から誘ってくれた時や、バスターズ全員で食べる時は一緒。そんな時はやはり、気兼ね無く食べられる。

しかし心は重い。

再度ひじきに箸を伸ばした時だ。

「どうした能美？　元氣無いみたいだな？」

「わふっ！？」　きよ、恭介さんですか…びっくりしました…。」

「いや、逆にこっちがびっくりしたが。ま、それより。何かあったのか？」

唐突に肩に手を置かれ、びっくりして飛び上がる。

その手の主は恭介。珍しく一人…かと思いきや、購買の方に理樹達もいた。

今日は旧メンバー五人で食べるらしく、クドはまた少しテンションが下がる。

ただ一瞬不思議に思ったのが、自分は理樹を見ていないのに溜め息を吐いていた事。

いつもなら理樹が…という感じでしょぼんでいたが、今は違っていた。

そしてそれは、最近も少しずつ同じ事があったのだ。

「…さては…恋、か？」

「わふっ！！　な、ななな何言ってるですか？　恭介さんそんな事は私…！」

「…相手は理樹、『だった』だろう？」

「わふーっ！　何で全部知ってるですかーっ!？」

恭介はその返答に、ニヒルな笑顔で返す。

いつかに真人が『恭介をギャフンと言わせてやろうぜ!』と言っていたが、これは確かに一生掛かっても無理そうだった。

赤面し、耳まで赤くなって俯く…かと思いきや、そうでは無かった。

クドは、笑っていた。

「…はい。でも、もういいんです。

リキは…鈴さんといった方が、心から笑えるですから。」

「…何か、悪いな。いや、何でか分かんねーけど。」

「恭介さんは何にも悪くないです。

…リキは、私の初恋の人だった、という事で。」

クドはそう言って笑い、恭介も優しく微笑む。

彼女に後悔は無かったかと言えば、そんな事は無い。

ただ、ちゃんと諦められたのは…理樹が、笑ってくれていたから。それが、クドには何よりも嬉しかった。

最後に頭にポンと手を置き、そこを去る恭介。

クドはペコリと頭を下げ、今度は笑顔でひじきを食べていた。

…

「わふー…結局一人で来ちゃったのです…。」

歩道を一人歩きながら、そう呟く。

もう一つの理由。

それは、バスターズの誰かに買い物を手伝ってもらう事だった。普通に考えれば無理な事は無い。と言うより、進んでついてくるのが一人二人はいるはずだった。

しかし偶然か、今日は女子全員が都合が悪いとの事。

男子は理樹を誘えるわけも無く、結果今に至っていた。

「一人で買い物は、何か物足りないのです…わふー…。」

小さく溜め息を吐きながら、とぼとぼと歩く。

するとある店の前で、クドは立ち止まった。

「マッスルメイトご用達…井ノ原さんが来たら喜ぶかもです、あはは…。」

外から見ただけでも分かる、危ない雰囲気。

ポスターには筋骨隆々な男たちがポーズを取っていたり、筋トレをしている写真があったり。

店内もむさ苦しい男達がうようよしていた。

こんなところで立ち止まっていたでは恥ずかしいので、再び歩き始める。

立ち止まっているとところを見られたら、問答無用で引きずり込ま

れそうだ。

数分程歩くと、目的の店が見えてきた。

今日の買い物はストレルカとヴェルカの食べ物である。

「どれがいいでしょうか…?」

一人でそんな事を呟きながら、クドは種類を選んでいた。

：

「一杯買っちゃったですー…。」

両手一杯の紙袋を抱え、よたよたと歩くクド。
端から見ても危なっかしい。ふらふらしている。

しかし表情は笑顔。

新味などがあって、少し多めに買ったらしい。

そのペースでふらふら歩く。

気付けば先程の筋肉店の前まで来ていた。

しかし立ち止まる理由も無く、クドはそのままスルーする。

その時だった。

「うおっ…！　いってえじゃねえかおい…！」

「わ、わふっ…？　ご、ごめんなさいです…。」

「ガキがよたよた歩いてんじゃねえよ！　もうちよつと周り見ろやコラ…！」

「す、すみません…。」

柄の悪い不良とぶつかり、抱えていた紙袋の中身が散乱する。不良は明らかに広がって歩いていたが、そんな事は知らないと言わんばかりにクドを責め立てる。

無論クドは反論もできず、謝りながら落ちた物を拾っていた。

しかしそんな彼女の邪魔をするかの様に、不良の一人がそれを蹴り飛ばした。

クドの目には涙が溜まる。

「邪魔なんだよ！　一生そうやって這いつくばってろ…！」

「う、うっ…ひどい、ですっ…！」

そうやって非難するクドを気にせず、他の不良が遂にクドに向けて拳を振り上げる。

目を瞑り、下を向いた時だった。

「うおらあああーっ!!」

「ぐああっ!!」

「な、何だてめえっ!? うわあっ!!」

「問答無用だあっ!!」

不良グループの悲鳴と、聞き覚えのある怒声。

殴る音や蹴る音、果てには叩き付けられる音が聞こえる。

クドは恐怖で、ずっと目を瞑ったままだった。

どれほど時間が経ったかは分からない。

気付けば怒声はやみ、代わりにざわざわとした雰囲気か辺りを支配していた。

「おい! 大丈夫か!」

「::?」

「大丈夫かクー公!? 怪我は!」

ゆっくりと目を開くと、そこには見覚えのある大男が立っていた。随分と短い制服を乱れさせ、顔面には打撲の痕がある。

しかしそんな事を気にせず、無事だと分かったクドを見て歯を見せながら笑っていた。

「井ノ原、さん::?」

「ったく、びっくりしたぜ。いきなり絡まれてやがるんだからよ

「？」

「…井ノ原さんっ！！」

「なっ！ …おいおい、止せよクー公。」

親指を立てて笑う真人を見て、クドはいきなり飛びつく。

周りの視線を気にせず、一心不乱に泣き続けた。

真人が頭を掻きながら、キョロキョロと周囲を見ていた間も。

そしてやっとその事に気付き、慌てて真人から離れる。

『やってしまった感』が否めないのか、頬を染めてあたふたしている。

「あっ、あのあのその、そういう意味では無くてその、今のはやっぱり怖かったからであってやっぱりこう…！」

「落ち着けよクー公。それよりも、だ…！」

溜め息を吐きながら、慌てるクドを一気に抱き上げる真人。

その強大な腕からは逃げる事は不可能。

一瞬何が起こったか分からず、高くなつた景色に驚く。

「警察が来ちまう！ さっさとずらかるぜ！！」

「わ、わふーっ！？」

そのまま成す術も無く、川原までクドはお姫様抱っこ状態だった。

：

「ふー…スリル満点だったな。」

川原の斜面で大の字に寝転がる真人。

その横には、体育座りするクドの姿が。

真人を見て小さく微笑み、視点を再び前に戻す。

「…助けてくれて、ありがとうございます。」

「ん？ ああ、大した事じゃねーよ。俺もたまたま筋肉店にいた
だけだしな。」

「やっぱり来てたですかっ!？」

「おうよ。あそこは行きつけの店なんだぜ?」

来そうだとは思っていたが、まさか本当に来ているとは。

クドは目を丸くし、真人を見ていた。

確かに真人の筋肉なら、あの場所においても何ら不自然な事は無い。

「氣い付けろよクー公? あーいうバカどもは特にな。」

「わふー…分かりましたです。」

「…ま、そういう事で。じゃな、クー公。」

「あっ…!」

何故か声が出てしまう。

立ち去ろうとした真人は、不意に掛けられた声に当然振り向く。そこには、物言いたげにこちらを見ているクド。

「ん？　どうかしたか？」

「あつ、いえ：何でも無いです、あはは。」

自分から呼び止めようとしたのに、笑って誤魔化すクド。しかしそれは仕方の無い事。

何故なら、本人でさえ何故呼び止めたか分からないのだから。衝動的に声が出てしまった？　違う。

お礼を言いたかった？　違う。

そんなクドを見て、真人は小さく笑う。

「一緒に帰るか、クー公？」

「…はい。」

真人に微笑み返し、自分も立ち上がろうとする。しかし足首に妙な痛み。

先程まで座っていたから分からなかったただけだった。

一向に立ち上がらないクドに、真人は声を掛ける。

「どうしたクー公？ 怪我か？」

「わふー…足、捻挫しちゃったみたいです。」

「…ったく、仕方がねえなっ！ っと。」

「わふーっ!？」

すると再び真人はクドをお姫様抱っこする。

しかし今度はさすがに恥ずかしい。寮までこれは厳しかった。

「井ノ原さんっ！ さすがにこれはちよっとっ…!」

「ああ、そうか。んじゃ、肩に座らせてやるよ。」

その言葉にクドは頷き、真人の右肩に座る。

そして、そこから見た景色に感嘆の声を漏らした。

夕暮れ時の川原。

川は太陽の色に染まり、魚が何匹か飛び跳ねる。

いつも自分が見ていたところより遥かに高い。

理樹が言っていた事の意味が、ようやく理解できた。

『見る場所が違えば全てが違って見える』という言葉が。

「…どうした？」

「いえ、何でもありません。…帰りましょー!」

「おう！ 筋肉さんがこむらがえったするか？」

「何ですかそれは！？　凄くかつこいいのです！！！」

真人は意気揚々と筋肉さんがこむらがえったの内容を説明し、クドは終始笑っていた。

修学旅行以来見せる事の無かった、心からの笑顔。一緒にいたい人といられる事への、感謝の笑顔だ。

リトルバスターズ随一の天然筋肉馬鹿こと井ノ原真人と、バスターズの小さなマスコット能美クドリヤフカ。

二人の新たな始まりは、この日の出来事だった。

END

短編 真人とクドリヤフカ（後書き）

どうだったでしょうか？

短編二本目で、今回は真人とクドリヤフカのストーリーです。

感想随時お待ちしております！

励みになりますので、どんどんお書き下さい！

短編 AFTER STORY (前書き)

WARLING!!

この話にはネタバレが盛り込まれております。
更に、今までの短編二つとは違って重い話です。
注意してご覧下さい。

短編 AFTER STORY

「ふー…いい風だな。」

「あはは。気に入ってもらえたか？」

「ああ。最高だぜ、小毬。」

屋上のフェンスに凭れ掛かっている恭介と小毬。

その後ろには、袴姿の謙吾にいつも通りの真人。

風に亜麻色の髪を靡かせているクドと、その隣で本を読む美魚。もちろん、ハイテンションの葉留佳と普段通りの来々谷もいた。

昼下がりの屋上。

空は晴れ渡り、優しい風が吹いていた。

「…いいもんだな、やっぱ。」

「どうした、らしくないな恭介氏？」

「…感傷に浸るってーのも、案外悪くないもんだ。」

不思議そうに恭介を見つめる来々谷の視線に、恭介は小さく微笑み返す。

その目は曇り一つ無く、メンバーを見渡していた。

「真人！」

「おう。」

「謙吾！」

「ここに。」

「小毬！」

「はいっ！」

「来々谷！」

「何だ？」

「能美！」

「わふー！」

「三枝！」

「はいヨッ！」

「西園！」

「はい…？」

全員に号令を掛ける恭介。

そして唐突なそれにも、メンバーは笑顔で答える。

その事に、恭介は嬉しそうに笑った。

風が頬を撫でる。

秋の優しい風が。

「…。」

「…心配してんじゃねーよ恭介。お前が送り出したんだろ？」

「…そうだけどよ、やっぱ、な…。」

「…恭介さん…。」

俯いた恭介の頬を伝う涙。
声を殺し、肩を震わせる。

その姿に、真人と謙吾は目を合わせて頷いていた。
女子メンバーもまた、それぞれが違う表情を取っている。

「……り……！ ど……く……！？」

「お……き！ ……え……んだ！」

すると小さな声が耳に入る。

聞き慣れた二人の声。

皆が何としても守りたかった、大切な希望。

その声に、小毬やクドまでもが泣き始める。

謙吾も目頭を押さえていた。

「来たぜ、恭介……？」

「ああ、分かってる……。」

「……く、うっ……！」

バンッ！！

屋上のドアが勢い良く開かれ、二人の生徒が姿を現す。

黒髪の男子生徒と、茶髪の女子生徒。

息を荒げ、屋上を隈なく見回している。

膝に手を着いているのは鈴。
その後ろでフェンスに手を掛けているのは理樹だった。

「…どうしたの、鈴？」

「…聞こえたんだ。」

「聞こえたって…何が？」

鈴が振り向かずにそれだけを言う。

理樹はそんな彼女の背中を見つめながら、悲しげな表情になった。

「…恭介や、小毬ちゃんの声。」

「…鈴も、聞こえてたんだね。」

「…！ 理樹っ…！！」

鈴は振り返り、理樹に抱きつく。
その胸に顔を埋め、泣いていた。
普段の彼女からは見られない程、表情をくしゃくしゃにして。

理樹は泣かずに、唇を噛み締めていた。

「あたしっ…バカだった…！」

恭介の事きつく当たったりっ、小毬ちゃんの前で恥ずかしがったりっ！

あの時は、こんな事は考えてなくて…！

皆、ずっと一緒だと思ってっ…!!」

「…うん。僕も、そう思ってた。

『今がずっと続けばいいのに』。

それだけを、願ってたんだ。」

鈴の背中に手を回し、優しく抱き締める。

子供の様に泣きじゃくる鈴を、優しく宥める様に。

「…みんな、もう…いないんだな…っ！」

「…。」

「恭介も、小毬ちゃんも！」

真人も謙吾も、クドもはるかもっ！

くるがやも、美魚もっ…。

…みんな、いないんだっ…!!」

「鈴…。」

でもね。

理樹はそう言って、鈴の顔を見る。

泣き続けて頬が赤くなり、目には涙が溜まっている。

そんな彼女を包み込む様に、理樹は言った。

「…僕がいるよ。」

僕が、鈴を守ってみせる。

僕が、鈴を引っ張ってみせる。

…だから、泣かないで。ね？」

「…理樹いっ…!!」

「ほら、泣かないで…ううっ…!!」

涙腺が決壊し、理樹も涙を流し始める。

二人で抱き合い、長い間ずっとそこにいた。

その二人には見えない。

屋上にいた、恭介達の姿は。

ただ、声だけは届いていた。

いないはずのリトルバスターズの…永遠の仲間達の声が。

「…鈴、ちゃんっ…うっう…!!」

「泣かないで、です、小毬さん…。」

「そーだよ、理樹君も、その方がいいよ…っ。」

「…うむ。だが、泣きたい時は泣いていいさ。」

「…そうですね。人の涙は、そのためにあるのですから。」

「理樹っ、鈴っ…ちくしょうっ…!!」

「恭介よ…大丈夫だ。お前が心配、する事は無い…!!」

「…ま、理樹と鈴なら大丈夫さ。あいつらは、強いんだぜ?」

真人がそう言い、理樹と鈴を見る。

…リトルバスターズは、不滅だ！

謙吾の言葉が脳裏を過ぎり、理樹は屋上の広い場所に目を向ける。

そして一言、こう呟いた。

「…さようなら。リトルバスターズ…。」

…

「…。」

パラパラとページを捲る。

茶色い写真に写っていた少年達や、カラーの大きな写真に写っていた少女達。

パタリとアルバムを閉じ、ソファに凭れ掛かる。

「…見てたのか。」

「え？ あ、うん。…懐かしくてね。」

「あたしにも見せろっ。」

ボフツと理樹の横に座り込み、エプロンを付けたままアルバムを奪い取る鈴。

その足元には猫が群がっていた。

しかし本人はそんな事を気にせず、アルバムを開く。

「…どう？」

「…懐かしいな。」

「…うん。だよね。」

「理樹がほとんど笑ってないぞ。」

「それは、鈴も一緒。」

「ぬう…。」

幼少時代に撮った写真。

恭介の手から逃れようとする鈴と、ボロボロ黒焦げの服を着た真人に肩を組まれて戸惑う理樹。

恭介の隣には、一番冷静だった謙吾が歳不相応に腕を組んでいる。

そして、あの夕暮れに川原で撮った写真。

一番後ろにはリトルバスターズ男子メンバー。左端の真人は親指を立て、右端の謙吾は背中のリトルバスターズロゴを自慢げに見せ。恭介はそんな二人の肩に手を回している。

前列真ん中には理樹と鈴。そしてその周りには、群がるようにして女子メンバー。全員が笑顔で、理樹と鈴だけが戸惑っていた。

「…笑っとけばよかったね。」

「…そだな。」

二人で目を合わせ、小さく苦笑する。

「…なにみてるの？」

「うわあっ！ す、すごいビックリしたじゃないか。いいやくちやくちやびっくりだ。」

「くちやくちやって、なにが？」

「気にしないでいいよ。お母さんの口癖だから、ね？」

「…うんっ」

いつの間にか理樹と鈴の横には小さな男の子が立っていた。

まだ幼稚園児だろう。言葉もぎこちない。

その子は何故か興奮している鈴を見てから、理樹の膝の上に座った。

気持ち良さそうに、理樹の胸に凭れ掛かる。

その横で微妙に眉を顰めている鈴がいたが、理樹は気付く事も無かった。

「なにみてたの？」

「えーっとね…お父さんとお母さんの思い出、かな？」

「おもいで…みせてみせて。」

「うん。…いいよね、鈴？」

「いいだろ。」

鈴も頷き、その子はページを開く。

すると偶然か、川原で撮った写真のページに。
その写真に見入り、目を離そうとしなかった。

「おとうさんとおかあさんだ！」

「うん、よく気付いたね。凄いよ。」

「…このひとたち、だあれ？」

理樹と鈴の目を見てから、写真に写った皆を指差す。

二人でアイコンタクトを交わし、理樹が口を開く。

「この人達はね…『リトルバスターズ』っていうんだ。」

「りとりるばすたーず…？ おとうさんとおかあさんの、おともだち？」

「うん。おともだち。」

網戸から優しい風が入り、鈴の髪を撫でる。
さりげなく理樹の肩に頭を乗せ、目を瞑る。
その頬は少しだけ、赤くなっていた。

「僕と鈴の…大切な、大切な仲間達。」

ページが風でぱらぱらと捲られ、子供は飽きたのか膝を降りて走っていった。

アルバムを閉じ、静かに目を瞑る。

鈴の暖かさを感じながら、小さく笑みを漏らす。
今は怖くなかった。暗闇も、孤独も。眠る事さえも。

「ありがとう…リトルバスターズ…。」

鈴の肩を抱き寄せながら、理樹はそう呟いた。

END

短編 AFTER STORY (後書き)

さて、いかがでしたか？

今回は言えば、本編のアフターです。

ちょっと重いですが、これが一番書きたかった内容でもあります。

感想随時お待ちしております！

一言でも感謝感激です。

よろしくおねがいします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7818p/>

Little Busters ! -Side Story's-

2011年1月3日23時49分発行